



県文化財指定記念特別展

八日市地方遺跡

— 地中から今、弥生時代の甕 —



石川県小松市教育委員会

ごあいさつ

今年度、八日市地方遺跡の出土品984点が、石川県指定有形文化財の指定を受けたことを記念して、小松市立博物館にて県文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡—地中から今、弥生時代が甦る—」を開催致します。本書は、その企画展の解説も兼ねた、八日市地方遺跡の概要を示したものです。

八日市地方遺跡は、今からおよそ2400年前の北陸における中核的な集落跡であります。出土品は、弥生時代の生活全般の様相を網羅したものであり、過去の暮らしを復元し、現代の生活様式に繋がる貴重な資料であります。

今日、私たちの生活の中で、大きな比重を占める稲作文化の原点がここにあります。現在は整備された小松駅周辺ですが、発掘調査で甦った地中からの弥生時代のメッセージに耳を傾けて頂きたいと思えます。

これらの小松における貴重な財産が、一人でも多くの方々の目に触れ、さらには、次世代を担う子どもたちにこの財産を託していければ幸いです。

平成18年11月

小松市教育委員会
教育長 矢原珠美子

〔凡 例〕

- 1 本書は県文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡—地中から今、弥生時代が甦る—」の解説図録として作成したものである。
- 2 パンフレット掲載写真は展示資料の全てではない。
- 3 本展の企画及びパンフレットの執筆・編集は下濱貴子が主に担当し、坂下恭規、宮田 明、西田由美子の協力を受けた。
- 4 掲載写真の名称に*がつくものは、小学館が撮影したものであり、考古資料大観掲載のものである。

目 次

| | | | |
|----------------|----|------------|----|
| ごあいさつ 凡例 | 2 | 農耕 | 14 |
| 発掘調査の概要 | 3 | まつり | 17 |
| 1 遺跡の発見 | 1 | 4 甕 | 20 |
| 2 環濠集落の誕生 | 2 | 5 釜 | 22 |
| 3 埴輪浅谷(旧河邊)の調査 | 6 | 6 多種多様な道具 | 24 |
| 4 原住域の調査 | 8 | | |
| 5 墓域の調査 | 10 | 生産と流通 | |
| | | 1 木器生産 | 28 |
| 弥生人の生活風景 | | 2 土器からみた交流 | 30 |
| 1 狩猟・採集・漁撈 | 12 | 3 製玉 | 32 |

1. 遺跡の発見

小松市八日市地方遺跡は、小松市日の出町・八日市町地方地内に所在する今から約2400年前、弥生時代中期の大規模な集落遺跡です。遺跡は、梯川と旧今江湯・木場湯に挟まれた小松平野のほぼ中心部、河川・潟湖と日本海を中継する水上交通の要衝に位置しています。

1930年（昭和5）、小松市在住の後藤長兵衛氏が通称苗代割の水田から磨製石斧を2点採集したのが遺跡発見の契機となり、昭和24年11月に小松高校、昭和25年9月に明治大学と石川考古学研究会の合同で発掘調査が実施されました。発掘調査で発見された土器は、昭和27年に開催された日本考古学会第10回総会において、杉原荘氏により「加賀・小松出土の弥生土器」として報告されました。以後、北陸の櫛目文土器を示す弥生土器の標識名として「小松式」とよばれるようになります。その後、1993年から小松駅東土地区画整理事業に伴い、小松市教育委員会は8か年にわたり約3万2千㎡の大規模調査を実施し、石川県埋蔵文化財センターにより1997、1999年の2か年にわたる発掘調査が実施されました。平成に入り、実施された広面積の発掘調査の成果から、集落は埋積浅谷（旧河川）を中央に南北に展開していることが判



遺跡の位置

東は国道8号線を境に、西はJR小松駅を境にした現在の小松駅中心部に位置する。

明。さらに集落内には多重に環濠がめぐり、方形周溝墓、井戸、掘立柱建物跡、平地式建物跡などが発見されました。出土遺物は、膨大な量の木製品、石製品、土製品等がみられます。それらの中には玉生産、木器生産を行っていたことや、広範囲に及ぶ地域間交流が行われていたことを示す遺物がみられます。



後藤長平氏寄贈
(小松市教育委員会保管)

2. 環濠集落の誕生

環濠集落誕生以前

八日市地方遺跡から発見された遺物からは、遺跡の時代の変遷を読み取ることができます。もっとも古いもので、縄文時代の遺物が、埋積浅谷(旧河川)の地山砂とそれを侵食したと思われる砂の中から見つかっています。これらは、縄文時代後期から晩期のもですが、連続的ではなく散片的なものです。次に、縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器が、埋積浅谷最下層からみられます。環濠集落の中心に流れる埋積浅谷は、この時期から形成され、人々に利用されていたものと考えられます。科学的分析の成果から、河辺には、ハンノキ、トチノキなど河辺林が分布しており、周辺にはナラ林が主で、カシ林も分布していたようです。この時期の遺構としては、こういった環境下で、埋積浅谷肩部にドングリの貯蔵穴が作られるようですが、基本的には採集の場であり、おそら

く居住の主体は別の場所にあったのでしょう。

環濠集落の形成と発展

弥生時代中期の初め頃、前時期にみられたナラ林やハンノキ林は減少し、イネ科の植物が増加したことがわかっています。これは、河辺に分布するハンノキ林やナラ林が切り開かれ、集落域と水田などが作られたことを示しており、人が居住し始め、環濠集落が形成されたと考えられます。

遺跡の主体である環濠集落の姿を大まかな流れの中でみていきましょう。

【集落Ⅰ期】

縄文土器と縄文土器がみられ、西から移動してきた人々と、以前から当地にいる人々が共存して村づくりを行ったものと思われます。集落は、埋積浅谷を利用し、領域を区画するように、兩岸に半円状の環濠を掘削します。この時期から、埋積浅谷のくぼ地を利用した木器貯蔵がみられ、農具や木製食器の未成品が出土します。これらは、集落開始当初から、木器生産が行われていたこと



弥生時代前期の遺物

県内では出土例の少ない遠賀川式土器とそれに伴う在地の土器群。

弥生時代後期の遺物

環濠集落の廃絶後、埋積浅谷の肩部にて、祭祀行為が行われた際の土器群。



を示しています。

〔集落Ⅱ期〕

環濠集落の発展期にあたります。土器では、条痕文土器がほとんどみられなくなり、櫛描文土器が主体となります。北陸独自の櫛描文土器は条痕文土器と、西から伝播した櫛描文土器の融合で作られたものです。いわゆる「小松式土器」の成立です。Ⅰ期に形成された環濠は砂で埋まっており、新たに多重の環濠が再掘削され、遺跡内に回るようになります。集落規模は拡大し、埋積浅谷の両岸に回る環濠内には、井戸、掘立柱建物、平地式建物、土坑や数多くの柱穴がみられます。乾燥を好み人里植物の性格をもつヨモギ属、アカザ科・ヒユ科などの草本が増加し、寄生虫の卵が多くみられることから集落域の拡大と人口の増加が窺われます。居住域の中には、木器生産、玉生産に関わる遺物が、各々別エリアで集中してみられ、盛んに行われた様子が窺われます。また、これらを取り囲むように各エリアごとに方形周溝墓が形成されていたことから、集落は複数の集合体で形成されていたものと思われます。水田跡は調査箇所からは見つかりませんが、イネ科の花粉が豊富に見つかることから、近接した箇所には水田が分布していたものと思われます。遺物の出土は前

時期にもまして増加します。北陸独自の土器が作られる中、東海地方や近畿北部、山陰・山陽地方の土器やそれらの影響を受けて在地で作られた土器もみることができ、集落は広域なネットワークをもっていた様子が窺われます。

〔集落Ⅲ期〕

前時期に大きく拡大した集落は、環濠はほとんど埋まり、居住域であった箇所は次第に方形周溝墓が展開する墓域へと変化し、縮小方向へと向かうようです。埋積浅谷の肩部からは、ヒシやトチの貯蔵穴や貝層がみられ、当時の食生活を示すものが顕著にみられます。西方から凹線文土器が波及し、在地で作られる土器にも影響が現れ始めます。それと同時に、遺跡内には祭祀具、武器類がもっとも増加してみられるようになります。

環濠集落解体後

これ以後、埋積浅谷はほとんど埋まり、環濠集落は解体、廃絶し、遺跡は空白時期を迎えます。その後、弥生時代後期にはいり、埋積浅谷肩部には、ほぼ完形に近い土器が1箇所からまともに出土します。ただこれらは、人の居住を示すものではなく、祭祀的、一時的な行為によるものでしょう。

| 区分 | 畿内 | 八日市地方 | 集落 | 八日市地方遺跡の変遷 |
|--------------|-----|-------|------|------------------------------------|
| 縄文後期 | | 0 | | |
| 縄文晩期 弥生前期 | I | 1 | | 埋積浅谷より、遠賀川式土器出土・遺構は確認されず。 |
| | | 2 | | 散見的に遺物が、埋積浅谷よりみられるのみ。 |
| 弥生中期 前葉 | II | 3 | | クヌギ・アベマキ等の貯蔵穴形成。 |
| | | 4 | I期 | 環濠掘削開始。環濠集落の成立 |
| | | 5 | | 埋積浅谷肩部に木器貯蔵開始 人面付土器・鳥形土器・裝飾整柱出土 |
| 弥生中期 中葉 | III | 6 | | 環濠再掘削。 居住域拡大。 |
| | | 7 | II期 | |
| | | 8 | | 井戸 掘立柱建物跡 平地式建物跡等 |
| 弥生中期 後葉 | IV | 9 | | 居住域縮小。 武器類・絵画土器などの祭祀具隆盛。 |
| | | 10 | III期 | 埋積浅谷肩部に貝層・貯蔵穴(ヒシ・トチ等)形成。 集落廃絶。 |
| 弥生後期 | V | | | 埋積浅谷がほぼ埋まった後、一部の肩部にて土器祭祀あり。 |

八日市地方遺跡の変遷



集落Ⅰ期の土器*

条痕文土器と櫛描文土器の両者を見ることができ、櫛描文土器は、近畿北部の搬入品や影響を受けて作られたものがみられます。条痕文土器は、中部圏域内では類似した様相をもっており、近郊地とのネットワークを窺うことができます。



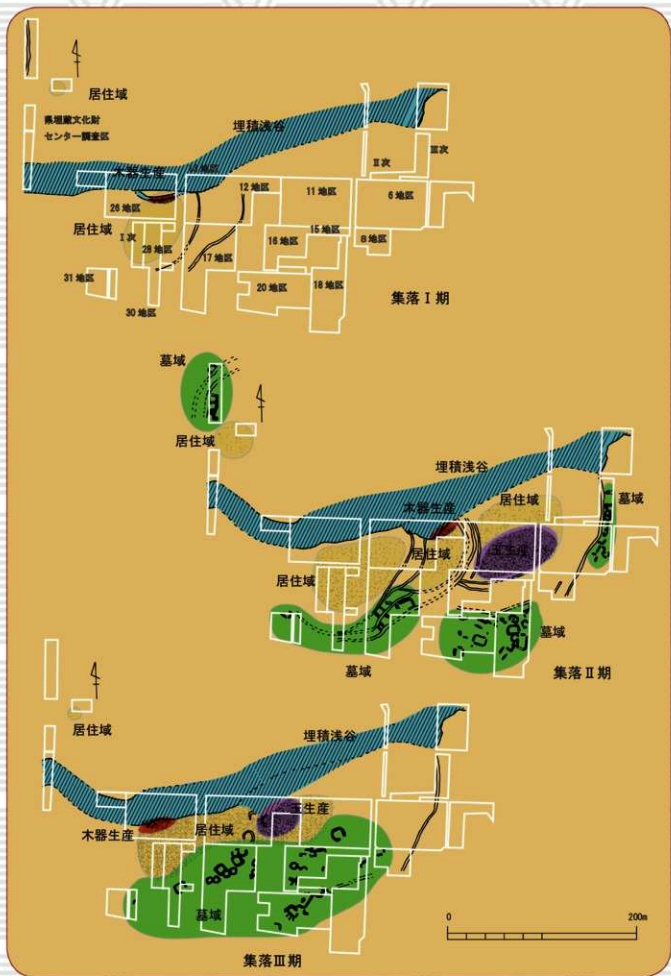
集落Ⅱ期の土器*

条痕文土器がみえなくなり、櫛描文をもつ土器一色になります。櫛描紋様の中には、条痕文土器から発展した紋様などがみられ、北陸独自の紋様が作られます。それらを総称して、「小松式土器」と呼ばれています。



集落Ⅲ期の土器*

西方から、凹線文土器が搬入し、在地の小松式土器にも技術的に影響がみられるようになります。また、器種が豊富になり、高杯やミニチュア土器などがみられるようになります。



3. 埋積浅谷（旧河道）の調査

遺跡の中央には、おおよそ最大幅 40 m の埋積浅谷がみられます。環濠集落形成以前にあたる弥生時代前期では、水流は強く、砂層の堆積と侵食が繰り返し行われていたようです。環濠集落形成以後は、さほど水流は強くなく、人々にとって利用しやすい環境であったと思われます。時折、泥炭層の中に砂層を挟むことから、河川増水が幾度かあり、その都度、流れは変化をみせたのでしょうか。浅谷肩部には、いくつもの

くぼ地が見つかっています。また、浅谷からは、水源を利用した物資の運搬以外にも、さまざまな側面をみるることができます。肩部にみられるくぼ地を利用して、木器貯蔵を行ったり、食物の水漬貯蔵、祭祀行為、廃棄場として利用されたことが膨大な量の遺物からみることができます。環濠集落廃絶以降の景観は、水位が上昇していく中で、水流も弱まり、弥生時代後期頃には沼沢地化し、ヨシの繁茂する状況になったと思われる。



埋積浅谷の検出状況

水の流れは、北東から南西に流れていました。川の大半の埋積は、泥層であり、膨大な木製品、土器、石器が出土しています。出土した中には、「シカと狩人を描いた絵画土器」、「把付磨製石剣」、「鳥形木製品」、「木甲」、「木製品の未成品」などがみられます。

貝層検出状況

埋積浅谷肩部にて、円形状に貝類の集中がみられました。貝類は、マシジミ、ヤマシジミを主体とし、サザエ、オオタニシなどがみられます。またこの中からは、残りにくい獣骨遺体や魚骨が良好な状態で見つかりました。これらから、当時の食生活の一端を垣間見ることができます。



貯蔵穴検出状況

浅谷肩部からは、集落Ⅰ期以前にドングリ（クヌギ・アベマキ等）、集落Ⅲ期にはヒシ、クルミ、トチの貯蔵穴が見つかっています。



埋積浅谷のくぼ地を
利用した貯木場

26地区調査区では、埋積浅谷のくぼ地を利用した、貯木場が見つかっています。その中からは、容器、農耕具、弓、工具などの未成品が数多く出土しています。盛んに利用されたのは集落Ⅰ期の段階で、それ以後は、廃棄場、祭祀場として利用されています。

貯木場の土層断面

下層からは未成品の木製品が、上層に向かい板材や棒材、祭祀具などがたくさん見つかりました。深さは最大で、1.2mを測ります。



埋積浅谷から出土した数々

鉄斧の柄



かご籠付土器



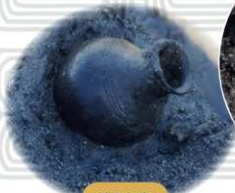
つかつきま さいせつけん
把付磨製石剣



鳥形土器



前期の壺



木製容器の未成品



4. 居住域の調査

居住域と思われる箇所からは、さまざまな機能の痕跡（遺構）がみられます。それらを大きく区分すると、次のようになります。領域を区画したり、防衛的機能や排水の機能をもつと思われる環濠、給水するための井戸、住まいや作業場、保管場としての平地式建物跡、掘立柱建物跡、柵等の無数の穴（ピット）、ものの廃棄や貯蔵用の土坑。立地的環境の制約から、居住域の領域拡大が

できなかったのでしょうか。これらの遺構は、時期を通して、幾重にも錯綜して見つかっています。また、このエリアでみられる手工業生産としては、碧玉製の管玉製作があげられます。遺跡全域から石材はみられ、その量は全国的に突出するものと思われます。さらに、未成品が多く集中する箇所では、石針（管玉の穴をあける道具）や擦り切り具、砥石など玉製作に関わる工具も一緒に見つかっています。



居住域の検出状況

建物や土坑、ピットの痕跡は、黄色い砂地に黒色の砂や泥土が埋まった状態で見つかります。これらは、重複した状態で見つかり、色調や土の含有物の違いから、切り合いを確認し調査します。

(17地区調査区 北から)

居住域の完掘状況

埋積浅谷に接した箇所には、木器の貯木に利用したと思われる隅丸長方形の土坑がみられます。また環濠や無数のピット、土坑が展開している様子が窺えます。

(12地区調査区 西から)



17地区調査区



12地区調査区

環濠の掘削状況

環濠の調査の際には多くのあぜを設けて、その断面で土層を観察します。深さはおおよそ1mほどで、形状は逆台形をしています。環濠内には、1/2程度埋まった後、膨大な土器、石器、木器が埋められています。



平地式建物跡検出状況

床面積約 50 m²を測ります。周囲には溝がめぐり、溝がない場所は入り口と思われます。建物は 4 本柱を支柱としており、何度か建て替えが行われたようです。また、溝内や床面、建物周辺からは、多量の碧玉ヘマダマが見つかっており、管玉作りが行われていたと考えられます。

(11 地区調査区)



建物の柱跡検出状況

4 本の柱跡には柱根が残存していました。おそらく、平地式建物跡の柱と思われます。(12 地区調査区)



管玉の未成品検出状況

(12 地区調査区)

井戸枠の内側



土器の検出状況

土坑の中には、完成の土器や破損した土器が埋められていました。

(6 地区調査区)



粘土ピット検出状況

環濠、埋積浅谷、ピット、土坑とさまざまなところから粘土の塊が発見されます。土器作りに使用したのでしょうか。

(12 地区調査区)



井戸枠検出状況

遺跡から発見された井戸枠は、一木の割りめき枠と樹皮製の曲物状の 2 種類がみられます。多くは樹皮製の井戸枠で、円形に巻いた後、杭で固定していました。(11 地区調査区)

組み合わせ銅検出状況

銅柄ツバと銅身ツバが外れた状態で、一緒に埋められていました。

(12 地区調査区)

5. 墓域の調査

八日市地方遺跡で見つかったお墓の種類は、土壙墓、木棺墓、方形周溝墓があげられます。方形周溝墓とは、方形のマウンドをもち周囲を溝で区画された低墳丘墓を示します。当遺跡では、約70基ほど見つかっています。集落Ⅰ期段階では、現在、土壙墓しか確認されていません。集落Ⅱ期に入ると、方形周溝墓が出現し、お墓は環濠を利用して、居住域の外円部に作られます。それ

らは居住域に対し4単位の群に分かれて、造墓されたようです。集落Ⅲ期に入ると、Ⅱ期に作られた位置から発展し、居住域を侵食していく形で造墓されたようです。現地遺構面がほとんど削平を受けているため、方形周溝墓の主体部は残りにくく、確認されたのはわずか3基のみです。確認された主体部はすべて、マウンドに対し1体のみで、組み合わせ式木棺を利用したものであることがわかっています。



組み合わせ銅検出状況

17地区6号墓の周溝内からは、組み合わせ銅や鍬が見つかっています。お墓を造る際に使用したものでしょうか。

墓域検出状況

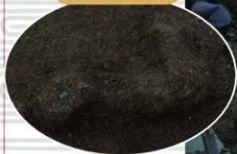
この調査区から見つかった方形周溝墓は計8基あります。集落Ⅱ期からⅢ期にかけて造墓されていますが、集落Ⅱ期の段階では、環濠に沿う形で造られており、集落Ⅲ期では、環濠を埋めた上に造られています。

(17地区調査区)

17地区1号墓

主体部は、墳丘に1体のみで、被葬者は木棺に収められていたようです。木棺内からは、管玉がまとまって、35点見つかっています。

管玉検出状況





18 地区 1号墓

17 地区 1号墓とくらべ、主体部の残りが悪く、かろうじて木棺痕跡のみが残っており、主体部であることが確認されました。主体部は、墳丘と軸を合わせた形で、中央につくられています。墳丘の規模は、周溝も含めて、長軸約 10m × 短軸約 7m を測ります。周溝の一部きれている箇所は、陸橋部と考えられます。



墓域検出状況

集落Ⅱ期の段階ではおもに四隅のきれる周溝をもつ方形周溝墓が造られていたようです。その後、集落Ⅲ期に入ると、以前のお墓を埋めるように造墓され、規模にも大小と格差がみられます。また、お墓の周溝を利用して、溝が階段状に掘削されています。

(20 地区調査区)

木棺こくわん小口検出状況

唯一、木棺が発見された主体部です。残念ながら、1/2 以上は、調査区外と思われ、後世の破壊も受けており、箱形になる小口一枚のみの発見になりました。(20 地区調査区内 2 号墓)

狩猟

弓と矢

遺跡からは、200点以上の石鏃、50本以上の弓が見つっています。石鏃の主な石材は近郊地で採取される輝石安山岩ですが、遠隔地の材であるサヌカイト、下呂石、黒曜石などもみられます。これらは、狩猟だけの用途ではなく、武器としても使用されていたと思われます。



石鏃



矢柄



石鏃の装着復元図



クジラ

シカ

カウソウ

シカ

獣骨

イノシシ

タヌキ



弓

1. 狩猟・採集・漁撈

弥生時代の人々は、稲作以外にも食料調達的手段として、狩猟・採集・漁撈を行っていました。発掘調査から出土した動物遺体には、シカを始めとし、イノシシ、タヌキ、イヌ、キツネ、カワウソ、クマ、テン、クジラ、カモ、サギがみられます。魚類にはコイ科が多くみられ、貝類には、海で取れるものと潟湖・田で取れるものがみられます。多くはヤマトシジミ、マシジミで、

次にオオタニシ、マルタニシ、カワニナ、サザエ、マガキ等がみられます。植物遺体には、ヒシ、クルマミ、トチ、ヒョウタン、ドングリ(クヌギ・アベマキ等)、アワ、キビ、シソ属(シソ、エゴマの類)、ブドウ、ウリなどがみられます。これらは、すべてが採集ではなく、畑地により栽培されていた可能性も考えられます。道具としては、狩猟用に弓、漁撈用には、漁網(土罾、石罾)、タモ網、アカトリ、籠がみられます。

採集

ドングリ



ヒョウタン



モモ



ヒシ



クルミ



クリ



トチ



オオタニシ



カワナ



サザエ



マガキ



漁撈

タモ網杵

遺跡から出土するタモ網杵は、杵木のみのもとの、枝分かれた材を利用し、組み合わせによる網を装着するもの（右写真）がみられます。どちらも、両端を合わせて結束して杵状にしたところに網を張り、使用されたものと思われます。



タモ網杵



石槌



アカトリ



かい
漕

開墾



一木鋤



組み合わせ鋤



曲柄平鋤



狭鋤

除草

大型石庖丁

現在の用語では、大型石庖丁といわれているものですが、手に持って使用する小型の石庖丁とは用途が異なり、柄を装着する除草用の刃部と考えられています。



大型石庖丁

2. 農耕

大陸から北部九州に伝わった稲作技術は、急速に日本列島に広がります。当遺跡からは現在、発掘調査箇所から水田は見つかっていませんが、自然科学分析の結果から、さほど遠くない箇所には水田はあるものと推定されます。また、集落の開始期から農耕具がみられることから、農耕に適した水利の良い箇所に環濠集落を形成したものとされます。さらに稲作は、農耕具の製

作工程資料や炭化米の出土がみられることから、道具を作り、使用し、食すと生活に密着した、必然的なものだったのでしょうか。稲作農耕には、開墾・耕起・除草・収穫・脱穀とそれぞれの作業に即した道具が使用されています。開墾には幅の狭い鋤（狭鋤）や鋤、耕作には幅の広い鋤（広鋤）、土を均すのにエブリ、収穫には石・木庖丁、脱穀には、杵と臼が使用されます。それらの道具は、地域の耕土や作業目的に即した特長を持ち、発展・改良していったようです。

耕作

くわ どまわけ 鍬と泥除

広鍬には、鍬に泥除
 が装着するタイプのも
 のがみられます。泥除
 は、身と柄の装着を補
 強する役目と鍬で湿田
 を耕す際、泥が足元に
 飛び散るのを防ぐため
 に付けられました。



鍬と泥除の装着図



広鍬



泥除



またわ
又鍬

田をあるく

たげた と 田舟

田下駄は湿田で農作業を行う際、体が泥の中に沈まないようにする履物はきものです。
 田舟は湿田での物資の運搬に利用します。



田下駄



田下駄



田舟

収穫



炭化米

土坑から塊で見つかりました。朮がついたままの状態、均一な方向のため、稲穂を束ねた状態で、保管していたものと考えられます。

収穫具（石庖丁と木庖丁）

石で作られた磨製のものや石を打ち割ってできた端片を利用したもの、木で木目を考慮して作られたものと3種類がみられます。石器には刃部にイネ科をこする際に付着する光沢がみられます。



穂を刈る



磨製石庖丁



礫端片石器



木庖丁

脱穀



「脱穀する様子」

杵と臼

杵には縦杵と横杵がみられ、臼は小型の臼がみられます。縦杵は両先端の形状が異なり、食物を砕く場合と磨り潰す場合にに応じて使用されたと言われています。



小型臼



横杵



縦杵

ヒト

人物を象ったものには、人面付土器の他に、木偶、人形土製品がみられ、線刻板には人が描かれています。人物陽刻意匠板には2人の人物が描かれており、大きく表現されている方は、手の下に放射状の筋がみえます。これは、鳥装し袖振りする弥生時代のシャーマンを表現したものと考えられます。



木偶



人形土製品



人物線刻板



人物陽刻意匠板

シカ

弥生人にとってシカとは、聖獸かつ土地の地震であったと思われます。シカの絵は、土器にもっとも描かれたモチーフであり、また人形土製品の胸の部分にもシカが描かれています。これは、神（シカ）がのりうつたシャーマンを表現してつくられたものと思われます。



シカの線刻がみられる土器片



シカと狩人が描かれた絵画土器

3. まつり

弥生時代のまつりは、稲作農耕とともに、伝播し、定着し、稲の豊作、井戸、埋葬などに関わり行われました。まつりは、共同して行うことにより、人々にとって共同体の一員であることを確認し、結束を深めるうえで重要なものだったのでしょう。まつりに使われた道具としては、青銅製品、楽器、人や動物を木や土で象ったもの、装身具、容器などがあげられ、特に稲作豊穰に

関わるものが多くみられるようです。八日市地方遺跡から出土した祭祀具は、全国的にみても量は膨大で、さまざまな地域の特徴が混在してみられます。銅刻や銅鐻の出土はありませんが、それらを木や土で象ったものや、木でサカナ、トリ、ヒトを象ったもの、土でトリ、ヒトを象ったものがみられます。また、精神世界を表現するものとして、シカと狩人が描かれた絵画土器、人物陽刻意匠板、線刻板などもみることができ、ます。

サカナ

弥生人にとってもっとも身近な魚はコイと考えられ、土器や銅鐸、木器に描かれています。八日市地方遺跡からは、木で象った魚がみられます。これらは抽象的表現であるため、魚の種類はわかりませんが、海に近い遺跡でもあるため、海洋のものである可能性も考えられます。



鳥形土器



鳥形土器

トリ

八日市地方遺跡では、時期を通じて、トリを土器や木で象ったものが見られます。鳥形土器が立体的表現であるのに対し、鳥形木製品は、側面視点からみた板状のもので、尾の部分が板材に差し込むようになっています。



魚形木製品



鳥形木製品*



琴

八日市地方遺跡から出土した琴は、形状から槽作りの琴の天板部分と考えられます。その天板には、水上をこぐ様子を表現した舟と櫂と思われる絵が描かれています。また、重なる線もみられることから、舟だけでなく、複数の絵が描かれた可能性も考えられます。



舟が描かれた琴の天板



魚形木製品*

銅鐸形土製品

銅鐸形土製品は、甕にあたる部分を張り出すことにより銅鐸の形状を表現したのみの簡略的なものと、破片ですが忠実に模したものの2種類がみられます。



銅鐸形木製品



分銅形土製品

分銅形土製品

形状が分銅に似ていることから付けられた名称です。人物の顔の表現を略したものが描かれています。

線刻板

線刻には幾何学的な文様と絵画の2種類があげられます。幾何学的な文様は、土器にほどこされる文様と同一のものがみられます。絵画は、集落Ⅲ期に入るとみられるようになります。



線刻板



線刻板



ミニチュア土器

ミニチュア土器

鍋（甕）、壺、高杯、鉢とすべての器の形が模造して作られています。



舟形木製品

舟形木製品

舟を模造して簡略した形状につくられています。なかには舷側に櫂用の穴をもつものもみられます。

武器

武器形木製品

武器形木製品は、剣、戈、鏃の三種があり、形状と種類は多種多様にみられます。これらの出土数は全国的にみても筆頭に多く、当時の小松に居住する弥生人の金属器に対する意識の深さが窺われます。



磨製石鏃



銅 鏃



武器形木製品 *



把付磨製石剣



戈の柄

4. 戦い

弥生時代では、稲作農耕を行うことにより、土地や水を確保して一定箇所に定着し、水田の維持・拡大が余儀なくされました。それを起因として、人口増加や土地の占有のため、争いごとが行われ、集落内に防衛的機能をもつものがみられるようになります。八日市地方遺跡でも、環濠が複数にもめぐり、集落内の領域識別や防衛

的機能を持っていたものと思われます。武器としては、狩猟用だけでなく殺傷効果もみられると思われる大型の鏃や石剣、武具としては、木製桶、木甲がみられます。また、祭祀具としてあげられる銅剣や戈などの武器形木製品は、模擬戦に使用されたといわれ、これらが豊富に出土することからも、戦いに対して重要視する、弥生時代の人々の意識をみることができます。

武器



「盾と戈をもつ戦士」



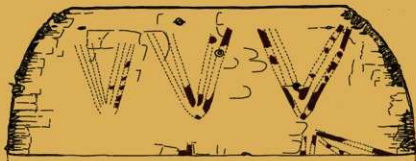
縦じ合わせ式木甲

縦じ合わせ式木甲

遺跡から見つかった木甲は、長方形板を布地などに縦じ付けて黒漆を塗布した「縦じ合わせ式木甲」の一片片です。



桶



たて桶

木製桶は、持桶（片手で持って敵の武器を払いながら攻撃武器を併用する）と置桶（地上に立てて矢を防ぐもの）がみられます。右写真の桶は、全長153.5cmを測る大型品の組列式の置桶で、全長がわかる貴重な資料です。また中央部には、把手を装着した結合部分が残存します。上写真の持桶は、欠けているため全長はわかりません。端部は樹皮を結び合わせて補強されており、表面に黒色顔料で二重に縄文文様が描かれています。



桶

身につける



翡翠製の勾玉



管玉*



儀仗



土製勾玉



勾玉



ガラス玉



耳栓



勾玉



簪



竪櫛



木履

5. 装い

弥生時代の人々にとって服飾品には、自然環境から身を守るというだけでなく、身につけることにより呪術的効果を得るといった目的もあったようです。それらは、地域的な特徴を持ち、素材はさまざまなものを見ることができます。八日市地方遺跡から出土したものには、アケサリーとして、石製の管玉、石・土製の勾玉、

ガラス製の小玉、木製の竪櫛、簪がみられます。衣服は、絹や麻などを織り、身につけていたのでしょうか。布の出土はありませんが、木製の機織の道具や縫い針、石・土・木製の紡錘車（はずみ車）が出土しています。また、木製のはきものや、威厳や呪術的意味をもつと思われる儀仗もみることができます。さらに、人を表現した人面付土器から、顔にいれずみをいれていたことがわかります。

人面付土器

土製の人面からは、当時の人々の面立ちを窺うことができます。二つの人面は、顔の表現の仕方が異なり、左はまゆ、目もとの表現から縄文的要素が強く、右は面長のすっきりした渡来系弥生人が表現されています。



人面付土器

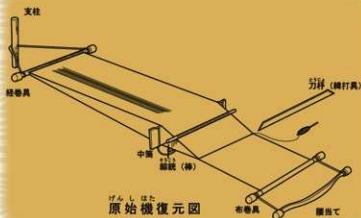


人面付土器*

紡織



土製紡錘車



布巻具

下写真の布巻具は、2つ揃って遺跡から見つかりました。同幅でありながら形状が異なり、ちょうど重なることから、一対で機織の部位に利用されたものと思われます。



石製紡錘車



布巻具

緯打具

うつわ 器



ふた むねいづば
蓋付無頸壺

蓋と身が紐で閉じ合わさるよう、2個1対の穴が施されています。



ふた とうすもぞうりん
木製蓋と土製の木製合子模造品

土製のものが、木製合子と同様の規格で作られたことを示しています。



す こうがい
透かし高台付小型容器

一木の削り抜き容器で、形、仕上げともに精巧に作られています。



す 透かし脚付皿

身の箇所が欠損し、二つ付く脚の一つのみが見つかりました。



木製高杯

加工痕がほとんどみられない水平な口縁が作られています。



ジョッキ形容器

一木で把手も作られた優品です。円形の底板が組み合います。



そう
槽

スギ材を彫りこんで作られたもので、広葉樹の容器に比べ簡素な作りです。



こうす
合子

口縁を欠しますが、蓋とセットで使用されます。

6. 多種多様な道具

八日市地方遺跡からは、土器や石器だけでなく、木製品の残りがよいことから、生活の中で使用された多種多様な道具が出土しています。日常使用される道具は、火をおこす道具（火きり臼）や椅子、ひも、籠、縄、横樋、穿孔具、砥石、掛矢などがあげられます。食物を調理する道具として、石皿や磨石、鍋（甕）があげられ、貯蔵、盛り、食す道具として、土製の壺、鉢、高杯や

木製容器、木製食事があげられます。蓋付の容器の中には、大切なものを保管したのでしょうか。木製の組合せ箱型容器や合子、土製の無頸壺など数多くみられます。また、木製食事は、日常使用したものであるよりも、優美で精巧な作りから、威信材ともいえる代物で、有力者が所有したものと思われます。その他に、施設の一部の材として、柱、板材、矢板杭、把手、材を組むための接合補助材や、組み材などがみられます。

食事具



匙

中型の匙です。イヌガヤ製で、精巧に作られています。



匙

完形の小型の匙です。宝珠形の柄の装飾をもつ優品です。



フォーク形木製品

現在のフォークと同様の形状をした木製品です。



榎杓子の未成品

全長 47.4 cm を測ります。一木で作られ、身を彫りこむ前の未成品です。



匙

柄と身の境界をもたずに、すんなりと広がるレンゲ形の匙です。

蔓 樹皮製品



樹皮製品

樹皮を環状にしたもので、大型土器の台座に使用したのと思われます。



縄

樹皮の紐を三つ編みに編んだものです。



曲物

樹皮を環状にしたものを、異なる樹皮の紐で結束しています。



籠

口縁付近から側面、底部と場所に応じて、編み方を変えて作られています。



蔓製品

全径約 10cm を測ります。蔓を環状に巻き上げたものです。

木の道具



よこ碇
横碇

わらや棒打ち、キヌタ、または豆打ち用などさまざまな用途がみられるものです。



かけ
掛矢

強度なカシ材で作られ、側面に敲打の後がみられます。



こしかけ
腰掛の脚

座板と脚を組み合わせる腰掛で、脚のほぞ穴は、もう一方の脚と横棧を渡すためのものです。



うす
火きり臼

スギ材で、5箇所火きり穴（回転摩擦により生じたくぼみ）がみられます。



とって
把手

中央部はくびれて握りやすいように握り部が仕上げられており、両端には組み合わせ用のほぞ穴が作られています。全長68cmの大型品なので、扉や門などの把手が想定できます。



枠組み材

環濠から出土したもので、横棧が16本枠に組み合わさった状態で見つかっています。現存する状態で横幅90cm、縦が90cmを測ります。横棧は、半円状に加工されており、枠材の方形のほぞ穴と比較すると、穴の形状の方が大きく、取り外しが可能であったようです。使用方法ですが、溜田に利用する大足と、窓枠状のもの両者があげられますが、形状から、窓枠状のものである可能性が高いものと思われます。

石の道具



打製石斧 (石鎌)

土を掘るとき棒で突いて土をかきだしますが、この棒の先に装着しました。鎌のようにしたものを石鎌と呼びます。



石臼と磨石

食物を磨り潰します。主にトチなどの木の実を粉引きするのに使用されました。



砥石

左：形も大きさも様々な砥石が使用されました。

上：特殊な砥石で、柱状に形を整え、厚手の石器に孔をあけたと考えられます。

石鎌

土器や薄手の石器などに孔をあけるのに使われました。なかには、石鎌からの転用品もみられます。



環状石斧

用途はわかっていません。周縁は刃が研ぎ出されており、中央の柄装着用の孔周辺には、接着材が一部残っています。



有孔円盤状石器

孔が貫通するものとそうでないものがみられます。どちらも回転運動に関わる石器で、孔が貫通するものは、軸棒の回転力を大きくする「はずみ車」と考えられています。



1. 木器生産

八日市地方遺跡から出土する木材は、スギ、ヒノキをはじめとし、アカガシ、クスギ、モミ、トチノキ、ハンノキ、ケヤキ、イヌガヤなど多数の種類がみられます。それらは、製品・用途に応じて選択され、利用されています。遺跡内で発見された木材は、製品形状が確定していない割材や製品形状がわかる未成品、成品と工程ごとにみることができます。これらから、成品に対し必要な大きさで木材を切断し、遺跡内に持ち込み、加工して完成

させたことが窺^{うかが}われます。形状の推定できる未成品は、農耕具（鋤、鍬、泥除）、容器、食事具、工具（斧柄）、弓があげられます。これらは、時期を通じてみられ、集落の開始期から終焉まで継続して作成されていたものと考えられます。また、木製品の加工遺物がみられる遺跡は限られており、地域における拠点的な集落で行われる例がほとんどです。ですから八日市地方遺跡でも、自給的なものだけでなく、製品化したものを近隣の集落へ分配した可能性が想定されます。

木を加工する道具



未成品の数々



容器の未成品



縦杓子の未成品



- ① 丸太のカシ材の心をはずした部分で柱目材の板材を作ります。その際、木目が縦長の位置になるように加工します。



- ② 突出部分を作り出し、一つずつ間に、切り込みをいれ、切断します。



- ③ 1 個体に切断されたものを、柄が装着できるように孔をあけて完成です。



広楾の製作工程



匙の未成品



広楾の未成品



広楾の未成品（三連）

2. 土器の交流

日常使用する土器には、当時の多くの情報をみることが出来ます。弥生土器は、一般に紋様で飾られるため、装飾の違いによって地域性をみることが出来ます。また成形技法や、粘土の混和材に利用する砂や植物遺体の有無からも地域性を如実にみることが出来ます。八日市地方遺跡から出土する土器は、さまざまな地域の特徴や素地の違ったものがみられ、それらは大きく三区分できます。第一に東方からの搬入土器（北陸北東部、信州）、

第二に西方からの搬入土器（近江、近畿北部、中国地方）、第三に南方からの搬入土器（岐阜、東海）がみられます。時期を通じて多くみられるのは、〈第二、三〉で、集落Ⅲ期に入ると、〈第一〉がみられるようになります。また、搬入土器以外に、当地において他地域の土器を模倣して作られたものや、技法や紋様の手法に影響を受けて作られた折衷的な土器がみられます。これらからも、時期を通じて、他地域との恒常的な交流が行われていたことが窺われます。

西方の土器



集落Ⅱ期



集落Ⅱ期



集落Ⅲ期



集落Ⅱ～Ⅲ期



集落Ⅲ期



集落Ⅰ期

小松式土器

東方の土器



集落Ⅱ期



集落Ⅲ期



集落Ⅲ期



集落Ⅲ期



集落Ⅲ期

近江の土器

南方の土器



集落Ⅲ期



集落Ⅱ期

3. 製玉

八日市地方遺跡では、緑の石を材料にした管玉の製作が盛んに行われました。材料の石は、小松市から加賀市にかけての山間部で採取されるもので、緑色をした凝灰岩の一種です。光沢がある美しい石で、同じ学名の別の石がありますが、見た目は似ているので、便宜上これも「碧玉」と呼んでいます。製作される管玉は主に直径約2mmの円筒形で、穴は直径約1mmと、非常に精密な加工技術を窺わせます。この穴は、安山岩で作った細い棒のようなものであけますが、あまりに細いことから「石針」と呼ばれます。

石針の材料となる安山岩は、国内でも産地が多いにも関わらず、他地域の産地からしか入手して

いません。また、原石を割るときに、石に溝を擦り切って四角く割れるように工夫していますが、この時に使う石は「紅菱石片岩」といい、紀伊半島から四国地方にかけての地域で採取されたものがもたらされているようです。

弥生時代中期には北陸から近畿地方にかけて、管玉製作された遺跡が数多く知られていますが、管玉そのものの原石となる碧玉が採れる北陸では特に盛んです。石針に使われる安山岩は、黒くなめらかな讃岐岩と呼ばれる石が好まれ、近畿地方や四国地方でたくさん採れます。

各地で製作活動に従事していた製玉工人たちは、お互いに材料となる石を融通しあっていたようです。

管玉製作の工具



砥石



擦り切り具



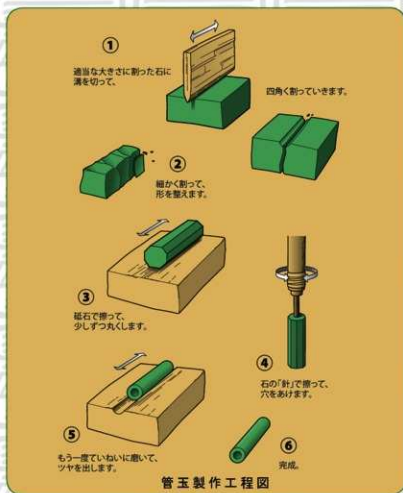
安山岩製「石針」の製作工程



瑪瑙製「石針」



安山岩製「石針」



引用参考文献

- あすなろ書房 2002 『私たちの暮らしのルーツ衣食住にみる日本人の歴史1旧石器時代～古墳時代』
安土城考古博物館 1994 『春季特別展弥生の祈り人～よみがえる農耕祭祀～』
安土城考古博物館 1996 『ムウの宴歌～稲作と弥生文化～』平成10年春季特別展
平本隆裕 1996 「3. 甲と楯」『弥生文化の研究⑨ 弥生人の世界』雄山閣
岩永省三 1997 「弥生時代の装身具」№.370 『日本の美術3』
岩永省三 1997 『金属器登場』歴史発掘⑦
小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡1』
(財)石川県埋蔵文化財センター 2004 『小松市八日市地方遺跡』
静岡市立登呂博物館 1992 「登呂の時代～むらびとたちのくらしぶり～」開館20周年記念特別展図録
静岡市立登呂博物館 1996 『樹のあるくらしー道具にみる知恵とこころー』特別展 登呂の時代シリーズ
辰巳和弘 1996 「弥生絵画と神話の世界」『弥生人の鳥獣戯画』香芝市二上山博物館
栃木県立なす風土記の丘資料館 1996 「弥生人のくらしー卑弥呼の時代の北関東ー」栃木県立なす風土記の丘資料館 第4回企画展図録
春成秀爾 1997 「絵の始まり」『歴史発掘5 原始絵画』講談社

イラスト文献

- 石鏃の装着図・・東大阪市教育委員会蔵 鬼虎川遺跡出土「石鏃装着の矢柄」より図化
鏃と定除けの装着図・・池上曾根遺跡復元図より転載
穂を刈る・・『私たちの暮らしのルーツ衣食住にみる日本人の歴史1旧石器時代～古墳時代』あすなろ書房より転載
鏃と定除けの装着図・・学生社「第1部 各地における稲作の起源と面期―事例報告」『シンポジウム 日本における稲作農耕の起源と展開』内池上遺跡の図より転載
脱穀の様子・・桜ヶ丘縄縹絵画より転載
盾と戈をもつ戦士・・奈良県田原本町所蔵 奈良県清水風遺跡出土絵画土器より図化
原始機復元図・・黒須亜希子 2006 「織機に関する歴史的研究」『住居に関する総合的研究(4)』(財)大阪府文化財センター・日本民家集落博物館共同研究会資料からの図を引用
石井の復元図・・大阪府教育委員会蔵 大阪府池上曾根遺跡の復元模型より図化

県文化財指定記念特別展
八日市地方遺跡―地中から今、弥生時代が甦る―
編集・発行 石川県小松市教育委員会 埋蔵文化財調査室
〒923-0801 小松市園町ホ6 2番地
電話 0761-24-8132
印刷製本 日本テリード出版
発行年月日 2006.11.30